

脈診から見える「未病を治す」ということ

港町診療所付属鍼灸院 院長 鳥谷部 創治

私にとって“未病を治す”とは、これから発症するであろう病気をみつけてその病気にならないように治療をすることです。ではどうやって“これから発症する病気”がわかるのでしょうか。その鍵は患者さんの脈にあります。未だに発症していない、或いは患者本人も気がつかない病気の兆しが脈に現れることがあります。

私が師と仰いだ井上雅文氏は次のような臨床のエピソードを語っていました。「患者さんが脳溢血で倒れるんです。もう一発で逝っちゃう人もいるし、後遺症を残している人もいろいろなんですけどね。何故だかわからない。だけどもあるとき気がついたんです、風邪症状がなくて人迎がこの脈をしていたら非常に危険なんです。これ風熱なんです。」ここで使われている脈診法は、氏が古医書をもとに“復活再構築”した人迎気口診です。

この人迎気口診は左右一カ所ずつの脈診部を診る脈診法で、左手を人迎と言い、右手を気口といいます。人迎の脈には外因が反映され、気口では内因が反映されます。そこで浮沈、遅数、虚実、滑瀦といった脈状をみることで病因と病証が導き出されます。

風熱とは病証名で、人迎での脈状が浮・数・実であることを表します。井上氏はこの脈状が脳血管障害を起こしつつある状態、或いはこんご起こすであろう状態と説明します。

明の時代の医書には人迎気口診を臨床応用したものが多く見られますが、そこには中風の脈状として「五蔵中風其脈皆浮」とあり「脈浮遅吉、急実大数凶」などあり、症状として「及其中也重則半身不遂口眼喎斜肌肉疼痛痰涎壅盛或癱瘓不仁舌強不語精神恍惚驚惕恐怖治療之法當詳其脈證推其所感之原」と病名、症状と脈状についての記述が見受けられます。しかし病気が発症する前の脈状については記載がありません。

氏は長年の臨床経験から、古典に書かれているような重篤な中風が起きる前に、脈にその兆しが現れることに気づき脳血管障害という命に関わる病気を未然に防ぐことにつなげたのです。

また、「未病を治す」とはこのように差し迫った危険を回避することだけではありません。その人がいずれ病むであろう病気を予測してそれを予防するというのも日常の臨床で行っています。

脈状の変化はその病証的な意味の変化でもあります。たとえば浮脈から沈脈への変化は陰から陽への変化、実脈から虚脈への変化は外傷から内傷への変化ととらえます。

血虚湿症という病証名のついた脈は、気口、人迎ともに虚、遅、沈、瀦で人迎よりも気口が大きい状態です。この脈状の陰陽、気血、寒熱などが逆転していくと気口、人迎ともに実、数、浮、滑で気口よりも人迎が大きい状態になります。これが風熱の脈状です。このような変化を起こさせないように治療すると同時に、患者さんに対して日常生活上のアドバイスをすることも可能になり、将来可能性のある脳血管障害を防ぐことができるのです。

以上のように、今後起こる病気を予測し、治療或いは生活指導などを行うことが「未病を治す」ことだと考えます。

■鳥谷部 創治（とやべ そうじ）



所属：港町診療所付属鍼灸院 院長

略歴：1979年 東洋鍼灸専門学校卒業

同年 港町診療所入所、現在に至る。

主な学会活動

1999年第48回（社）全日本鍼灸学会学術大会事務局長

2000年～2006年 関東支部事務局長

2006年～2009年 神奈川地方会会長

2008年～ 支部運営委員会委員、認定委員会委員、評議員

1991年 故井上雅文氏に師事。

1992年～脈学会会員—現在、古典鍼灸研究会付脈学会 運営委員